

# 秋田の偉人

『おもちゃのマーチ』の作曲家

おだしまじゅじん

## 小田島樹人



このコーナーでは、歴史上のさまざまな分野において活躍した秋田県出身の先覚者たちとその偉業を紹介します。今回は鹿角市出身の作曲家・音楽教育者小田島樹人(1885~1959)の生涯です。

里から木炭を取り寄せ、商いを始めた。九州にいた樹人も同じ年に高等学校を中退し、上京した。小田島家は樹人のほか、父や兄弟も俳句を嗜んでいた。「樹人」は次郎の俳号で、この名前は一家が東京で暮らした高樹町にちなんでいる。

### 西洋音楽と俳句に親しむ

樹人と音楽との接点を遡ると、彼が少年時代を過ごした故郷にある。鹿角郡長だった由義は近代化を推進した人物でもある。花輪町には秋田県内でも西洋の文化や音楽がいち早く入ってきた地域だった。日露戦争の頃には、町で出征軍人を歓送する行進には楽隊が先導して音楽を奏でた。この楽隊の中には樹人と兄弟の姿もあった。

明治41(1908)年3月、樹人は東京音楽学校に入学した。同級生には、のちに松井須磨子のヘカチューシャの唄で流行作曲家となった中山晋平もいた。病氣療養で休学を挟みながら、予科1年、本科器楽科3年を経て、大正3(1914)年に卒業。卒業後は東京芝区三光小学校で音楽教師になった。

大正4(1915)年、31歳の樹人は、頻繁に足を運ぶ「ホトト

ギス」の句会で詩人の海野厚(うらのあつし)に出会った。11歳年下の海野と樹人は、俳句仲間として意気投合し、親交を深めていった。

大正7(1918)年、児童文学者の鈴木三重吉が童話誌『赤い鳥』を創刊。当時の政府が主導した唱歌教材に憂い、子供の純粋な情操を育むための童話と童謡を創作して世に広める「赤い鳥運動」を開始した。この運動に影響を受けた海野は、童謡詩人を志すようになった。

樹人は、学生時代の病気が再発し、大正8(1919)年に三光小学校を辞職。同じ年に三枝綾野と結婚し、翌年には三菱金属鉱業研究所の図書係の職に就いた。当時の樹人は音楽からは離れた生活を送っていた。

### 花輪の名家に生まれて

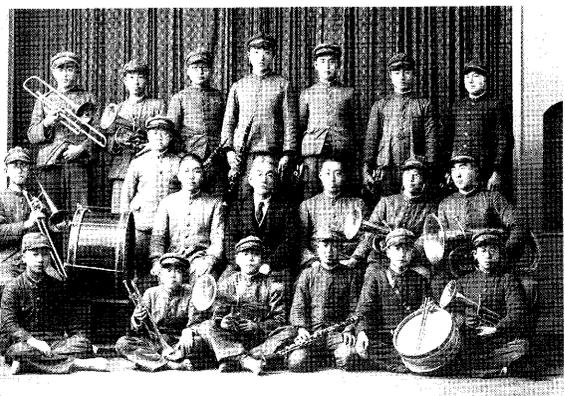
小田島樹人は、明治18(1885)年3月19日、鹿角郡花輪町(現鹿角市)に生まれた。生家は地元で代々続く「井桁屋」と呼ばれる造り酒屋を営む御用商人で士族だった。父は初代鹿角郡長を務め、の

子供時代に覚えた懐かしい童謡には、どんなに歳を重ねても、歌詞の一節を見るだけで口ずさめる曲が多いはず。へおもちゃのマーチ(赤い橋)へ山は夕焼け)など、心に残るメロディを生み出したのは作曲家の小田島樹人。彼は晩年、秋田の音楽教育の発展にも貢献した。

ちに花輪町長になった小田島由義(ゆづぎ)母は、夫とともに婦人修養会・白百合会を組織した秋田県初の婦人運動家の小田島ハツ。樹人はこの夫婦の六男二女の二男で、本名を次郎という。

樹人は花輪小学校の高等科を終えた後、明治32(1899)年に岩手県の盛岡中学へ入学。明治37(1904)年には鹿児島県の第七高等学校造士館理科に進学し、化学薬学を志した。

ところが翌年、明治38(1905)年5月27日の花輪大火により生家は類焼してしまった。これを機に、小田島家は一家を挙げて東京の青山高樹町に移り住んだ。由義は郷



楽器の演奏を学ぶ生徒たちと一緒に。

子供のための歌を

大正11(1922)年、小田島樹人、海野厚、そして東京音楽学校同窓の中山晋平、外山國彦の4人は新しい童謡楽譜シリーズをつくるために「鳩の笛同人会」



海野厚らとともに発刊した童謡楽譜シリーズ『子供の歌』第3集。



樹人が編集発行した月刊雑誌『教材楽譜』。

を結成した。同年12月、白眉出版社から『子供達の歌』第1集「赤い橋」を創刊。樹人は表題の「赤い橋」と「秋の夜」の作曲を担当した。大正12(1923)年1月の第2集「七色鉛筆」では「おもちゃのマーチ」を、そして同年5月の第3集「背くらべ」では「向日葵」(山は夕焼け)を樹人が作曲。いずれも海野が詩を書いた。海野が訳詩をした外国民謡も交えた『子供達の歌』シリーズは第4集まで編集されたが、最後のものは未刊となった。樹人は短い期間で、後世に残る名曲を送り出している。

樹人の親友であり、かけがえ

のないパートナーだった海野は、大正14(1925)年5月28日に、結核のため28歳の若さでこの世を去った。海野の死後、樹人は作曲よりも唱歌教材集の編集出版に取り組んだ。

昭和2(1927)年、樹人は三菱金属を辞めて都新聞編集局に入社し、俳壇選者となった。昭和6(1931)年頃には童謡「大曲小唄」へ花輪小唄など、当時流行していた小唄を発表した。

樹人は妻綾野との間に四女もうけた(一人は夭折)が、昭和8(1933)年1月、まだ幼い娘たちをのこしたまま、妻が他界した。

故郷の音楽教育に貢献

樹人を再び故郷に呼んだのは、卒業後に帰郷し、教職に就いていた実弟の阿部六郎だった。昭和



樹人は俳壇でも活躍。昭和12年、高浜虚子来町記念。(前列右から二人目が樹人、三人目が虚子)

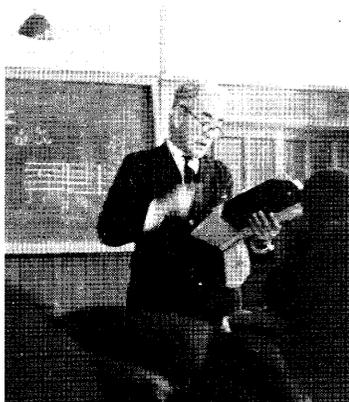
11(1936)年、樹人は六郎が教頭を務める県立花輪高等女学校(現花輪高校)で音楽と国語の教師になった。

昭和15(1940)年には県立秋田中学校(現秋田高校)の講師として転任し、秋田市に移った。昭和18(1943)年には、花輪高女時代の教諭仲間だった宮下トシを妻に迎えた。

銀髪頭で飄々としている樹人先生は、生徒たちから絶大な人気を誇った。「レコード鑑賞が楽しくて、シューベルトの「魔王」を4回も続けて授業で聞かせた」などの逸話も残っている。華々しい経歴を持ちながらも、出世にはあまり興味を持たず、講師のまま昭和29(1954)年に退職するまで夜学で教えた。

また樹人は、学校教育の現場のみならず、地域の生涯学習や、戦後の秋田県の音楽復興運動の第一線に立ち、音楽教育の発展にも尽力した。昭和25(1950)年には秋田学生音楽連盟を結成し、その翌年には月刊紙『音楽秋田』を発刊。秋田の人たちが素晴らしい音楽に親しむ接点をさまざまなかたちでつくり上げた。

昭和34(1959)年10月11日、樹人は秋田市榎山の自宅で74年の生涯を閉じた。樹人から教えを受けた学生たちは、のちに秋田や全国の音楽界をリードする存在に成長した。そして彼が作った歌は、今なお歌い継がれている。



秋田高校の教壇に立つ樹人。学生たちの人気者だった。

- 参考資料／『小田島樹人 人と音楽』(小田島樹人先生顕彰会)、秋田県広報協会編『秋田人物風土記(続)』(昭和書院)、佐川馨「研究報告」小田島樹人の生涯と教育実践」(『音楽表現学』Vol.12, 2014)
- 協力・写真提供／小田島輝夫氏、秋田県立博物館「秋田の先覚記念室」